

# 「ナザレ」の秘密



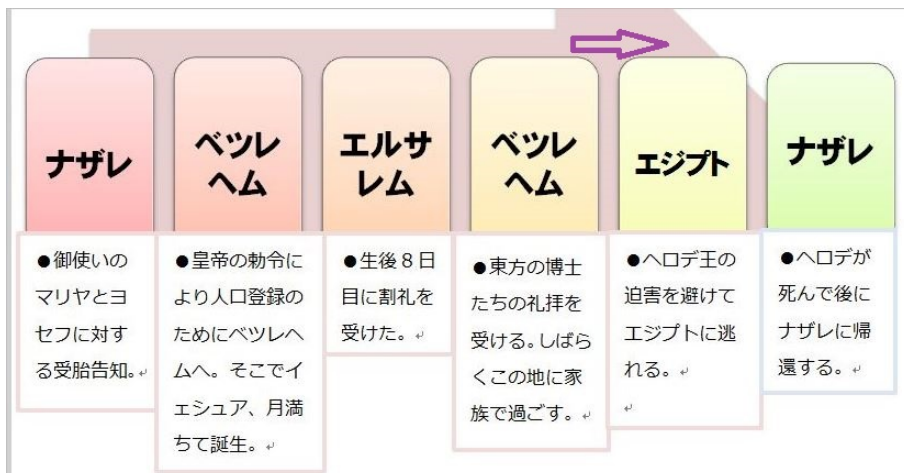
## ベレーシート

### (1) 神の必然としての「ナザレ」

●イエシュアが生まれたのはユダのベツレヘムでした。ベツレヘムの意味は「パンの家」です。天から生けるパンを与える者がそこで生まれたことは神のご計画における必然です。しかもそこはダビデの出生の町でもあります。ダビデにつながる子孫からイスラエルの支配者として生まれることと密接につながっているのです。しかし、イエシュアが育ったのはガリラヤのナザレという町です。イエシュアが育った町がなにゆえに「ナザレ」であったのか、その必然性を考えてみたいと思います。なぜなら、マタイが、これは預言者たちを通して「この方はナザレ人と呼ばれる」と言われた事が成就するためであったと記しているからです(マタイ 2:23)。つまり、そこには何らかの神の必然があることを言おうとしているのです。

### (2) ナザレからナザレへの旅

●イエシュアがベツレヘムで誕生した後、八日目にはエルサレムの神殿に行っています。それは割礼を施すためです。それからしばらくの間、ベツレヘムで過ごしたようです。というのは、40日のきよめの期間が必要だったからです。その後で、初子であるイエシュアを神にささげるために再度、エルサレムに行っています。ルカは2章39節で、その後、彼らはナザレに帰ったと記しています。そのことがマタイの2章22~23節とどう噛み合うのが問題です。イエシュア誕生の数ヶ月後(4ヶ月後)に、東方の博士たちが幼子イエシュアを礼拝するためにベツレヘムを訪れています。その後、東方の博士たちは、夢でヘロデのところへ戻るなどの戒めを受けたので、別の道を通って自分の国へ帰って行きました。彼らが帰って行ったとき、主の使いがヨセフに現われ、「立って、幼子とその母を連れて、エジプトへ逃げなさい。・・・ヘロデがこの幼子を探し出して殺そうとしています。」と言います。するとヨセフはその夜のうちに幼子とその母を連れてエジプトに立ちのき、ヘロデが死ぬまでそこにいと記されています。おそらくヘロデが死んだのはそれから数か月後のことだと考えられます。



【新改訳改訂第3版】マタイの福音書 2 章 19～22 節

19 ヘロデが死ぬと、見よ、主の使いが、夢でエジプトにいるヨセフに現れて、言った。

20 「立って、幼子とその母を連れて、イスラエルの地に行きなさい。幼子のいのちをつけねらっていた人たちは死にました。」

21 そこで、彼は立って、幼子とその母を連れて、イスラエルの地に入った。

22 しかし、アケラオが父ヘロデに代わってユダヤを治めていると聞いたので、そこに行くとどまることを恐れた。そして、夢で戒めを受けたので、ガリラヤ地方に立ちのいた。

●20 節の「イスラエルの地」とは、おそらくベツレヘムのことだと考えられます。しかし、すでにヘロデに代わってアケラオが治めていることを聞き、ベツレヘムにとどまることを恐れます。そして再び、夢を通して戒めを受けたことによって、彼らはガリラヤ地方に立ちのいたとあります。そして、ヨセフとマリヤの故郷であるナザレという町に行き住んだのです。本来ならば、ヨセフはベツレヘムに住もうと考えていたのです。ところが、夢で「戒めを受けた」ので、ナザレに行くことになったのです。それには、そうしなければならぬ必然性がありました。つまり、マタイが記しているように、「これは預言者たちを通して、『この方はナザレ人と呼ばれる』と言われた事が成就するためであった。」からです。

## 1. 「この方はナザレ人と呼ばれる」という預言はいったいどこに

●「ナザレ」という語彙を検索してみると、新約聖書では 30 回ヒットします。ところが旧約聖書では全くヒットしません。つまり、旧約聖書には「ナザレ」という語彙は一度も使われていないのです。イエシュアが少なくとも 30 年間、そこで生活することになるにもかかわらずです。

●「ナザレという町」は、当時、人口 500 人前後(150 人という見解もあります)の農業を中心とした小さな町であったようです。エジプトから出発した彼らの行く先は、21 節では「イスラエルの地」、22 節では「ガリラヤ地方」、23 節では「ナザレという町」と少しずつ狭められていきます。この箇所はヨセフの一家がナザレに移住したプロセスを説明しています。それは、イエシュアがどのようにして「ナザレ人」と呼ばれるようになったのかを明らかにするためです。ヨハネの福音書 7 章 41～42 節にはイエシュアについてこう記されています。



【新改訳改訂第3版】ヨハネの福音書 7 章 40～43 節

40 このことばを聞いて、群衆のうちのある者は、「あの方は、確かにあの預言者なのだ」と言い、

41 またある者は、「この方はキリストだ」と言った。またある者は言った。「まさか、キリストはガリラヤからは出ないだろう。」

42 キリストはダビデの子孫から、またダビデがいたベツレヘムの村から出る、と聖書が言っているではないか。」

43 そこで、群衆の間にイエスのことで分裂が起こった。

●このことは、当時の人々(特に、エルサレムの人々)がキリスト(メシア)についてどのように理解していたかを示しています。つまり、人々の間では、ガリラヤ出身のイエシュアがキリストであるはずがない。というのは、キリストはベツレヘムから出ると書かれているからだということです。確かに、その通りです。しかしマタイはイエシュアが「ナザレ人と呼ばれる」ということを書き記す必要があるという啓示を受けたのだと思います。それがマタイ 2 章 23 節のみことばです。

そして、ナザレという町に行って住んだ。これは預言者たちを通して「この方はナザレ人と呼ばれる」と言われた事が成就するためであった。

●イエシュアがどうしてナザレ人と呼ばれる必要があったのか。生まれはベツレヘムだと預言されていました。しかし同時に、育ちはナザレでなければならなかったのです。なぜなら、これは預言者たちを通して「この方はナザレ人と呼ばれる」と言われた事が成就するためであったからです。ところが、旧約聖書の中に、イエシュアが「ナザレ人と呼ばれる」と告げた預言者はひとりもいません。

●そこである学者たちは、「ナザレ人」ではなく、「ナジル人」の間違ひではないと解釈します。しかしナジル人は決して死者に触れたり、強い酒を飲まず、罪人の友となったりすることはありません。とすれば、イエシュアはナジル人とはほど遠い存在です。なぜならイエシュアは多くの罪人の友となり、死んだ者にも直接触れてよみがえらせたりしているからです。

●他の解釈として考えられたのは、「ナザレ人イエシュア」という表現は軽蔑的な表現だという解釈です。その根拠として、当時のユダヤ人たちがイエシュアとその弟子たちのことを「ナザレ人という一派」と呼んでいた事実(使徒 26:9)と、イエシュアの弟子となる前のナタナエルが「ナザレから何の良いものが出るだろう」(ヨハネ 1:46)と言ったことによるものです。それゆえに、軽蔑的な意味として、「ナザレ人イエシュア」と呼ばれるようになったと解釈しています。ちなみに、ナタナエルはナザレの近くにある「カナ」出身の人です(ヨハネ 21:2)。ですから、彼の言うことばには真実味があります。

●ところがもう一つの解釈があります。それは、イザヤ書 11 章 1 節にあるメシア預言です。

【新改訳改訂第 3 版】イザヤ書 11 章 1 節

エッセイの根株から新芽が生え、その根から若枝が出て実を結ぶ。

### (1) 「ネーツェル」(נֶטְוֵל)

●「エッセイの根から若枝(=「ネーツェル」נֶטְוֵל)が出て実を結ぶ」とあることから、その預言が成就したとする解釈です。「若枝」はメシアの称号です。この解釈に対して、ある人たちはその「ネーツェル」と「ナザレ」の関連づけがヘブル語の言葉遊び程度にしか見えないとしています。とすれば、逆に、イザヤ書 11 章 1 節の預言がどのように成就するのが曖昧となります。預言は成就しなければ、預言とは言えません。おそら

くマタイは、ヘブル語の「若枝」を「ナザレ人のイエシュア」(「イエシュア・ミンナーツラット」**יֵשׁוּעַ מִנְצֻרַת**)と同義であることを、聖霊によって啓示されたとしか言いようがありません。「ナジル派」でもなく、「軽蔑用語」でもなく、イザヤがメシアをエッサイの「若枝」であると預言したとするならば、イエシュアの出生の地がベツレヘムであったとしても、ナザレの地で育った若枝として起こって来なければならなかったのです。ここにナザレの秘密があります。しかも、イエシュアのナザレでの30年間は、やがて神のご計画を実現させる公生涯のための周到な準備期間であったのです。

●イザヤ書 11 章 1 節の「エッサイの根株から新芽が生え」と「その根から若枝が出て実を結ぶ。」は同義的パラレリズムとなっています。「エッサイの根株」とはエッサイから出る子孫(単数)を意味します。この預言はエッサイの息子であるダビデのことを指しているのではありません。なぜなら、このイザヤの預言はダビデの時代よりもずっと後だからです。「エッサイ」は「ベツレヘム」の人であり、ボアズとルツの子孫です。エッサイの系列をここでは「若枝」(「ネーツェル」**נֶצֶן**)と言い、後の「ナザレ」を意味していたと考えられます。したがって「**ナザレ人イエシュア**」は「**ダビデの若枝**」と言えるのです。

●「ネーツェル」の語源である動詞「ナーツァル」(**נָצַר**)には、「見張る、見守る、保つ、包囲する」という意味があります。イザヤ書 27 章 3 節には「わたし、主は、それ(麗しいぶどう畑)を見守る者(**נֹצְרֵי**)。絶えず、これに水を注ぎ、だれも、それをそこなわないように、夜も昼もこれを見守っている(**נֹצְרֵי**)。詩篇 31 篇 23 節には「すべて、主の聖徒たちよ。【主】を愛しまつれ。【主】は誠実な者を保たれる(**נֹצְרֵי**)が、高ぶる者には、きびしく報いをされる。」とあります。

●そうした意味の他に、「秘める」という意味があります。動詞「ナーツァル」(**נָצַר**)を分詞で名詞化すると「秘め事」となり、イザヤ書 48 章 6 節で使われています。

【新改訳改訂第3版】イザヤ書 48 章 6 節

あなたは聞いた。さあ、これらすべてを見よ。あなたがたは告げ知らせないのか。

わたしは今から、新しい事、あなたの知らない**秘め事**をあなたに聞かせよう。

●**秘め事**=隠されている事柄で、前もって予見できないこと。それは隠された宝(イザヤ 45:3)で、神によってのみ知られていることです(詩篇 139:12)。

## (2) 「ホーテル」(**הוֹתֵל**)

●「新芽」の「ホーテル」(**הוֹתֵל**)は、同義的パラレリズムによって「若枝」の「ネーツェル」(**נֶצֶן**)と同義です。いずれも単数名詞です。これらの語彙の背景には、ユダ王国は一旦滅びますが、アッシリヤに預言されているような滅びではなく、根が残されており、そこからメシアの象徴である「新芽」、あるいは「若枝」が生え出て来ることを預言しているのです。メシアを表す「若枝」としてのヘブル語は他にもあります。

### (3) 「ヨーネーク」(יֹנֵק)

【新改訳改訂第3版】イザヤ書 53章 2節

彼は主の前に**若枝**のように芽ばえ、砂漠の地から出る根のように育った。

彼には、私たちが見とれるような姿もなく、輝きもなく、私たちが慕うような見ばえもない。

●イザヤ書 53章 2節の「**若枝**」は「ヨーネーク」(יֹנֵק)という語彙で、「乳飲み子」という意味もあります。「ネーツェル」(נֶצֶר)の動詞「ナーツァル」(נָצַר)は「見守る、囲う」という意味があり、「若枝」は常に神によって見守られ、御手の中に囲われている秘めた存在だとも言えます。その意味で「ヨーネーク」も「ネーツェル」も同義と言えるのです。また、「彼には、私たちが見とれるような姿もなく、輝きもなく、私たちが慕うような見ばえもない。」とありますが、それはメシアの容姿とも、メシアの精神的・霊的な意味とも考えられます。つまり、華麗で勇壮な「エルサレム」のようではなく、むしろ「ガリラヤ」という辺境のみすぼらしい地でその生涯の大半を神によって見守られ、御手の中に囲われて過ごされたことの中に、隠された御国の秘儀があるように思われます。つまり、神の国の奥義は常に人の目には隠されたところにあるという真理を物語っているのかも知れません。その象徴が「ナザレ」なのです。それが「石」にたとえられるとするならば、「家を建てる者が捨てた石」がなくてはならない要の石であったのと似ています。

### (4) 「ツェマハ」(צֶמַח)

●エレミヤも 23章 5節で、「その日、わたしは、ダビデに一つの正しい**若枝**を起こす。彼は王となって治め」と預言しています。ここにある「若枝」のヘブル語は「ツェマハ」(צֶמַח)です。この語彙はイザヤ書 4章 2節の「その日、主の**若枝**は、麗しく、栄光に輝き、地の実は、イスラエルののがれた者の威光と飾りになる。」にも使われています。また、ゼカリヤ書 6章では「わたしは、わたしのしもべ、一つの**若枝**を来させる。」(8節)とあり、やはりそこにある「若枝」も「ツェマハ」です。「ツェマハ」の動詞「ツァーマハ」(צָמַח)には「芽を出させる」だけでなく、それを「育て上げる」という意味もあります。神がそうするのです。

●以上のように、「若枝」という訳語が同じでありながら、原語が「ネーツェル」、「ヨーネーク」、「ツェマハ」「ホーテル」と異なっていたとしても、神のご計画を遂行する「若枝」として、神が見守り、囲い、育て上げる存在として共通な意味をもっていることが分かります。

●まさに「ナザレ」こそ、神のご計画を実現する秘めた若枝として大切に見守られ、保たれ、育てられるという神の戦略的な場所だと言えるのです。



## 2. ナザレはイスラエルの回復と密接な関係がある

●「ナザレ」の町はガリラヤにあります。その場所からイエシュアは宣教を開始されました。なぜ、エルサレムではなく、ガリラヤから宣教が始まったのでしょうか。実は、そこにも神の深いご計画が隠されています。イエシュアが育った地はナザレでした。そして公生涯において最初の宣教地はガリラヤ湖の付近でした。イエシュアが来られたのは、文字通り、「**全地に散らされたイスラエルの民を集めるため**」です。それゆえ主はガリラヤから宣教を開始されたのです。

【新改訳改訂第3版】マタイの福音書 4章 14～17節

14 これは、預言者イザヤを通して言われた事が、成就するためであった。すなわち、

15 「ゼブルンの地とナフタリの地、湖に向かう道、ヨルダンの向こう岸、異邦人のガリラヤ。

16 暗やみの中にすわっていた民は偉大な光を見、死の地と死の陰にすわっていた人々に、光が上った。」

17 この時から、イエスは宣教を開始して、言われた。「悔い改めなさい。天の御国が近づいたから。」

●イエシュアが宣教を開始された「ゼブルン、ナフタリの地」、そこは当時の中心であったエルサレムから見ると、辺境の「異教の地」でした。しかし神にとっては人間的な判断とは異なり、きわめて関心のある地なのです。それゆえ、その「暗やみの中にすわっていた民は偉大な光を見、死の地と死の陰にすわっていた人々に、光が上った」のです。つまり、そこから、神のご計画とみこころ、御旨と目的が開始されたことを意味しているのです。そしてイエシュアはその地からご自分の弟子を選ばれ、活動を開始されました。このことは決して偶然なことではなく、すでに預言されていたことなのです。イエシュアは「大群衆を見て、羊飼いのいない羊のように弱り果てて倒れている彼らをか弱いように思われ」て(マタイ 9:36)、12人の使徒を呼び寄せて彼らを遣わします。そのときイエシュアは、彼らに「**イスラエルの家の滅びた羊のところへ行きなさい。**」と命じています(マタイ 10:6)。これはどういうことでしょうか。



●イエシュアの語られた「たとえ話」の中にしばしば使われる「失われた」ということばがあります。たとえば、ルカの福音書の15章には三つのたとえ話があります。そのたとえ話の中心的なテーマは「いなくなったもの」—つまり、「いなくなった一匹の羊」「なくした一枚の銀貨」「いなくなった息子の一人」です。そこにある共通の語彙はギリシャ語で「アポッルミ」(ἀπόλλυμι)という動詞で(その分詞が形容詞的に使われていますが)、それは「滅びた」という意味です。「滅びた」羊、「滅びた」銀貨、「滅びた」息子なのです。これらが見つかるまで捜して(あるいは、待って)、見つかるという話です。放蕩息子を妬む兄息子に対して父はこう言いました。「いなくなっていた(滅びていた)のが見つかったのだから、喜ぶのは当然ではないか」と(ルカ 15:32)。いなくなったものを見つけるまで探し出す主体は神であり、それがこれらのたとえ話の中心となっ

ているのです。

●ルカの福音書 19 章に「取税人のザアカイの救い」の話があります。

【新改訳改訂第3版】ルカ 19 章 5～7 節

5 イエスは、ちょうどそこに来られて、上を見上げて彼に言われた。「ザアカイ。急いで降りて来なさい。

きょうは、あなたの家に泊まることにしてあるから。」

6 ザアカイは、急いで降りて来て、そして大喜びでイエスを迎えた。

7 これを見て、みなは、「あの方は罪人のところに行って客となられた」と言ってつぶやいた。

●イエシュアのことばには、「・・することにしてある」という神の必然としての「デイ」(δεῖ)という動詞があります。いちじく桑に上っているザアカイに向かって、イエシュアが「ザアカイ。急いで降りて来なさい。きょうは、あなたの家に泊まることにしてあるから。」と呼びかけました。「泊まることにしてある」というのが神の必然です。一度も会ったこともないのに、相談もなく、だれがそんな予定を入れたのかと言われそうです。それは神の側(イエシュアの側)です。イエシュアは「わたしを遣わした父が引き寄せられないかぎり、だれもわたしのところに来ることはできません。」(ヨハネ 6:44)と言われましたが、イエシュアとかかわりを持つことが出来るのは、御父が引き寄せられたからです。それなしには御子とかかわりを持つことが出来ないのです。ここに神の必然があります。

●「デイ」(δεῖ)という動詞は、ヨハネの福音書 4 章にあるイエシュアとサマリヤの女との出会いにも使われています。「主はユダヤを去って、またガリラヤへ行かれた。しかし、サマリヤを通過して行かなければならなかった。」(4:3～4)。なぜサマリヤを通過して行かなければならなかったのでしょうか。それはそこに必ずそうしなければならない神の必然があったからです。事実、イエシュアはそのサマリヤの地でひとりの女性と出会ったことで、彼女の証言によってサマリヤ人のうちの多くの者がイエシュアを信じたのでした(ヨハネ 4:39)。サマリヤの人々も「イスラエルの家の滅びた羊」なのです。それゆえに、イエシュアは「サマリヤを通過して行かなければならなかった。」のです。

●このように神との出会いは決して偶然でなく、神の必然の中にあるのです。私やあなたがイエシュアと出会うことができたのは、私やあなたがこの世に生まれる前から、天と地の基が置かれる前から、キリストにおいて定められていたことであったのです。それが時至ってあなたはキリストと出会い、神の子とされたのです。とすれば、私たちはその神の必然に心を開きつつ、歩まなければならなくなるはずで

【新改訳改訂第3版】ルカの福音書 19 章 9～10 節

9 イエスは、彼に言われた。「きょう、救いがこの家に来ました。この人もアブラハムの子なのでから。

10 人の子は、失われた(滅びた)人を捜して救うために来たのです。」

●ここでの重要なメッセージは、ザアカイが救われたのは彼が「**アブラハムの子であったこと**」と、彼が「**イ**

「イスラエルの家の滅びた羊」の一人であったことです。しかし多くの人々は(エルサレムの指導者たちのみならず、民衆も)、このイエシュアのことばの真意を正しく理解することができませんでした。ちなみに、ザアカイのいたエリコの町は、かつてアッシリヤによって滅ぼされた地でした。

●「終わりの日」の再臨の時に、イエシュアは全世界に散った失われたイスラエルの民を再び集められます。これは神のご計画が実現するためになくてはならない、不可欠な出来事なのです。一見、この出来事は私たち異邦人には関係ないように見えます。しかし、「主を知る」者にとっては、神の永遠の御心を知る出来事なのです。私たちは自分と直接的に関係する出来事には真剣であっても、それほど関係がないと見えることについては冷淡です。しかし、光の子どもとされた私たちは、神のご計画とそのみこころが実現されることにもっともっと喜びを見出さなければなりません。なぜなら、神のご計画を知り、それに参与することが、神を愛することだからです。

## ベアハリート

●「ナザレ」に隠されている秘密は、私たちが考える以上にもっと深いものがあります。しかし、今回話した内容だけでもおそらく頭の容量がいっぱいになるほどです。創世記の話から一気にヨハネの福音書3章16節にレコードの針が跳んでしまうことで満足している方にとっては、なんのことを言っているのかさっぱり分からないはずです。しかし成長したキリスト者となるためには、こうした堅い食物を食べることが必要です。そのような者へと少しずつ成長していけるように、お互いに祈りたいと思います。

2016.12.4